



月 遠 18
號 969
卷 11



繪本金花散卷之十一

目錄

岩城兵庫頭被呂預奉

帶刀燒捨盟書奉

才原如急中奸刺帶刀奉

才原羅之伏才原圖

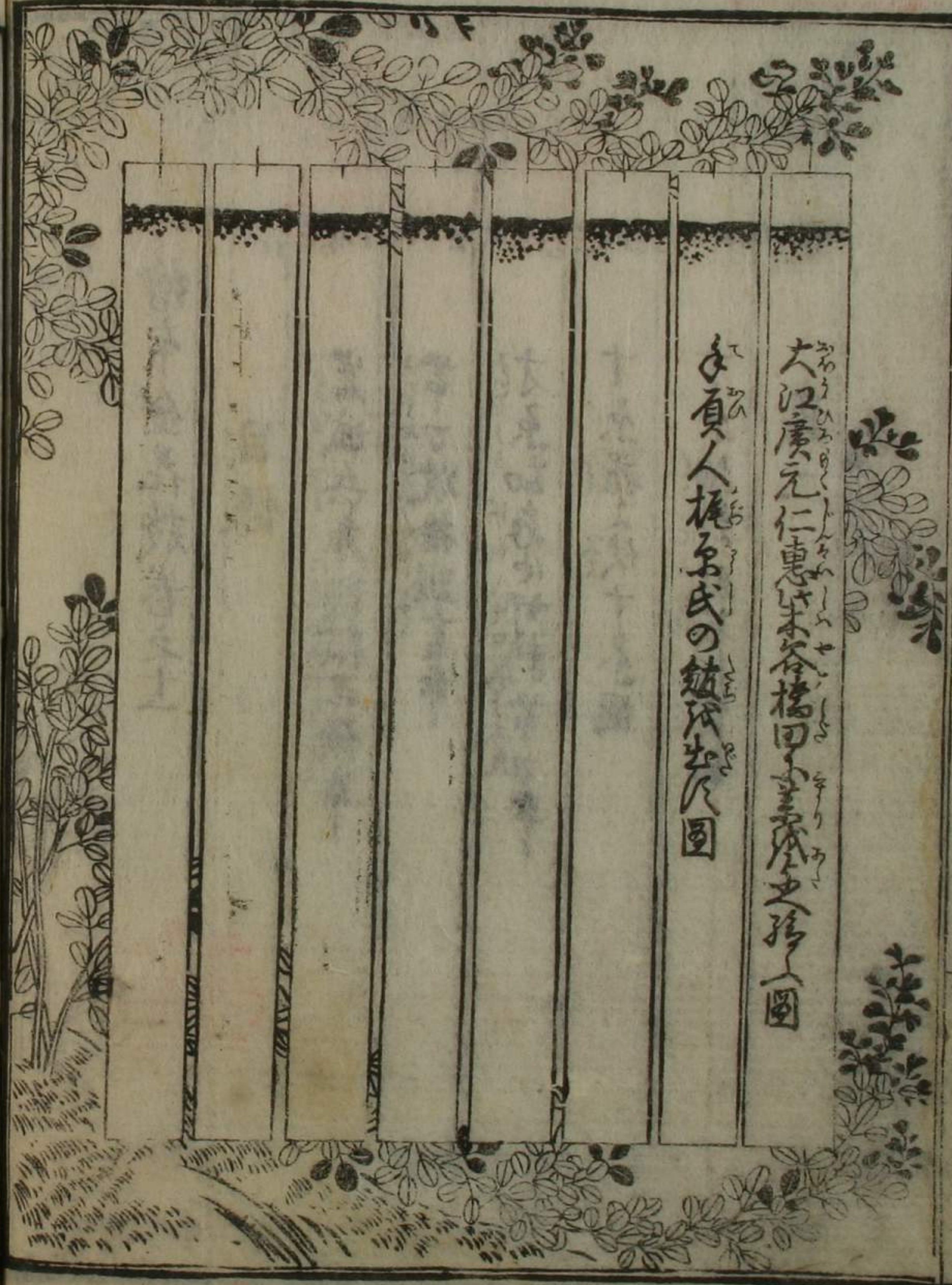
才原隔計服谷成突圖

其二

繪本金花散卷之十一



大江廣元仁惠おほえひろゆき末谷橋田すえやばしの妻つまの娘むすめの圖
女むすめ負おと人ひと梶かぢ系けい氏しの娘むすめの圖



繪本 金花談卷之十一

岩城兵庫頭いわぎへいこう被召あつり預幸よき

貞節まこと一関いっせき城主ぢゆうしゆ 伊達い兵部へいぶ正ただ

岩城兵庫頭いわぎへいこう秀勝ひでかつの家いへは、家いへ中ちゆうの諸士しよし安やすまらりし、た為な水みづ江え津つ思しありしとも、才さい系けい勸かん由ゆが、係けい兵へいと、梶かぢ系けい家けの威い勢せを、このとと、息いき江え浩こうと、吾われらと、とらぬ、その目め未みの判はんの終はつり、濫らん察さつ檢けん断たん後ご岡おか田た竹たけ八やち郎らう。大だい倉くら三さん郎らう尤なほ門かど概がい事じの命いのちを、合あへん、と、出でる、し下した後ごを、と、既すでに、今いま日ひ才さい系けい勸かん由ゆ兵へい庫こ頭づかひの、い、と、と、て、眼まなこ音ね事じ力ちからと、對たい立たひ、や、と、と、り、も、昔むかし同どうの、い分ぶんの、お、お、せ、と、と、と、ら、あり、大だい膳ぜん大だい丈ぢやう廣ひろ元げんお、お、と、有あ難なんと、と、ある、の、の、の、い唯ただ今いま兵へい庫こ頭づかひと、と、あり、是こゝろを、お、り、も、廣ひろ元げんの、時とき音ね事じの、事ことの、為ために、いの、ら、兵へい庫こ頭づかひを、捕とらへ、と、と、と、い、つ、り、共とも計けいと、と、と、い、い必かならず死しを、と、と、と、い、い生なまで、ん、も、と、と、と、い、と、と、と、い、才さい系けい勸かん由ゆ兵へい庫こ頭づかひに、落おつ、と、と、と、い、と、と、と、い、と、と、と、い、

とらねるの事をやぶ

帯刀焼捨盟書事

けとれた千代の鍬ゆへ兵庫頭中意なる不忠の徒夥しく有らざるを原動中
 罪伏し連判状帯刀の事み合ふる事なく扱ひて其のくちりと実言をもち
 定めたる腹切もあつた。信病のともぢらも毒をもあつた。又大膽の者いほの
 道達もさういふのち自ぬはれぬ事も死も首瓜割らるも同く死の道
 若くは帯刀に怒りし盟書論撃かとも扱ひて死へ入るに比し両方
 志気變ひて待もあつた。ゆへに同死せしむる原動帯刀をあげり鍬ゆへ
 之りと後緊しく軍機を修し善士之びてこれらるも原動をけりて
 諸士は度回み聚む。今日の討宜をのべ決りわけてけるに鍬のちちもこの討
 宜も同くさる不忠の人あるよう。盟書うらむに入るる入るに同封し一く罪をけり

ねたとも今日入るに比し其の志とも熱意も公めぐるに今兵庫頭
 一くこの義理あつた。あつた一徳の遂ひゆらも世に忘却して同封
 せしむるいと案一唯今連判状を封するに焼捨ぬことを同封後事ゆ
 直さう先好公悔て百倍の忠心をあつた。と既中申す投書をするをさう
 さら組せり。かの申す欽差帯刀の儀性も信ひ忠心のともぐる憤りを
 何ぞ不忠の圖賊をあつた。平あつた速に同封し一く怒りて討ひ逐ふ
 同封のものもさう公め若き言ひしてさう後日の報ひゆらむん公怒と
 忠心の事といはれざるをあげ願ふに同封し一く更と同事ゆび一く
 思慮をも見ゆける帯刀の一言をもいひたつた。大津も投書し討ひ
 ふ一くさうは是より家中あつた。徳もかり一くもを帯刀の討ひ
 用ひ。苗が鍬ゆへの強さゆへにむす討ひ。実の不忠入るの儀も

累負して下とあるがれども然るありて凡そ法刑と仁恵といひて行
 りてこそ評代長久の奉ひかき足も昔人國を治ること百年以て
 やめ殺を控下とありてこそ昔者ありて國を治るとは殊に自
 ら殺罰を拜いざして國治ること久しもの後ありてや荒涼の代
 ら死に死に死に民たりと上仁に七殺と拜いざりて下自
 悪を犯るなり。秦の高鞅の法律ありて嚴しうて六経其の
 と牛を殺せしむるも叶せぬも下たるのみ仁政を志しめ廢せ
 らる廢せぬ人も昔の法も改めしむるも君の恩は海に如く
 とあるべし。吳下の改道は傾いたる事ありて垂れしを
 仁者以揚んとするの法あり。吾道とて天下の善をこれに
 仁又仁の道ありてありてあり。仁の理も立死に受る人ありと

万代不朽の志平。その仁の教は衆も皆し。此れを
 斧斤の休を用ひしとも苦しむるもたは山嶽海城の属ひもせし
 飛ぬ休せざるのその殺戮の用ひて。況んや兵庫改を小使とて天下
 の諸侯をわがにめりて殺て苦しむるも此道たりとて其の
 あつて縁を食ひの何百人の難儀をよとて遠慮ありてこそ仁
 らく仁を重し。その堂に仁の教をよとて仁の仁問を益
 らしめし。仁恵行するは國家の長久とありて流石とてのび
 のとも神め貞清の潔なる人。凡そ強き飛ぬも強し。然るも
 明か。對交の千代とありて飛彈守も顔色やうに再度の對交
 けり。明か。明か七日とありて下知せしむるも是れ其計の
 あり。明か。千代の敏なり。只顧を裁を結とて明か。六日

再

再

再

再

再

再

再

預け之文原勘系由と服若輩刀再度の對立付らるゝあつて明日既來迄
 の身も留連すゝめざらるゝあり。召めあつて廿七日貞清の身へ来るも若輩服若
 輩刀向之周防鎧着け本若外記舊地司る。又原勘系由公めつと因興の
 前後共あるとの仕士半。教重も圍徒らる。梶原の鎧若も與とらるし。
 服若輩刀衙門の内も入兩鑑察にうやふとあるありとりめを頼務を田の兩人
 先達くもさう居らるゝ。若輩刀謹とけら以若女又原勘系由を以
 あつてけら、時ぞ若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども
 再び召らるゝと新對立作らるゝ上。刑人の格式もさし並りども。百連
 系とけら若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども。百連
 と約す兩人若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども。百連
 何へつと因獄もさし並りども。百連

再度の札めあるゝの罪積究ありしゆもあつて様通すゝりおつて
 先日大膳志士の戴許めらるゝも若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども。百連
 喜方勿備との事ありとり後ける。派若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども。百連
 楓の流候過るゝ官才又若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども。百連
 さら。廣若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども。百連
 遊若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども。百連
 大江朝臣若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども。百連
 信友は抽く着若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども。百連
 いかか勘系由若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども。百連
 裁判は若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども。百連
 勘系由若輩若極ありしゆ今日まゝ因獄もさし並りども。百連

傍きみくい今一表は吟味のやど給ひまじり。めでたきも早ざるも度え
おんけの申したまひ。言詰りみの中衆を今世がまことこの片を破碎
四人女子といども欺くことあるがらの邪偽きり。ひんて先日陳謝せし
こころみけ書に某も積みお遠ふしとてども。友千代を毒害は世の
おぬあひ友千代九死一生の大痛をゆるとれ集をして良劑の薬を
酒をとりぬ。慶安のころあせし。折紙など言詰りのゆるみせ
陳謝せし。も。終末その花公慶とてあせびて花公落し。ふれとや
傍きみくい六何也先白のま。ま。傍きみくいとおことつ。ア。かれ其時
左右に邪兵公没く脱せん。我。一。花を推回みせ。ひ。に友千代
と毒害せし。も。再度刺害公いとく刺んとをり。し。も。それ。り。おぬ
ありと公の花科もあち。唯今帯刀が盟書焼きてたると。や。再び
陳防し。公を道んと。ま。ま。も。世が方人せ。河並に右衛門。ころ
よりみ。の。其。改。立。る。の。七。十。余。人。と。ま。彼。案。を。て。小。捕。へ。ら。れ。た。ふ。ふ
引。を。ら。し。う。ら。今。ま。ま。藤。泰。張。儀。が。兵。公。振。す。も。一。と。び。流。布。せ。極。悪。の
花名。り。道。を。と。い。え。れ。り。と。理。花。の。白。み。責。ら。せ。才。原。効。を。存。由。赤。面。し。て
唯一。の。返。答。なく。ま。ま。お。た。れ。入。る。の。ゆ。遠。ひ。を。り。と。花。科。公。脱。れ。ん。と
は。り。一。腹。今。の。陳。と。る。も。二。言。唐。ひ。つ。び。げ。う。何。指。の。は。仕。を。作。つ。け。ら。う。た
か。し。も。云。裁。を。と。う。と。ま。ま。と。り。に。ぞ。抵。原。貞。清。も。と。ぞ。怒。う。の。秋。色
を。あ。い。一。石。百。千。万。の。仕。と。先。日。の。折。紙。と。傍。き。み。く。い。列。座。の。首。と。欺
一。と。り。る。暴。悪。の。り。の。ま。ま。何。の。公。や。出。せん。も。討。つ。が。一。い。う。あ。る。花。科。公。ま
せ。ら。く。も。遠。背。し。ま。ま。申。た。日。約。の。文。書。公。ら。う。と。ら。て。早。う。と。ん。別。々
同。文。周。防。舊。地。河。馬。西。人。ぬ。わ。ら。ぬ。た。子。細。あ。り。改。く。承。た。ぬ。り。ん。ご。の

傍きみくい

河並に右衛門

寛仁大度を以てけし居らば、いかに其の徳は是れぞと云ふべし。悔はる
 顔色あり。帯刀も、大原が勲代連綿と忠臣の子孫としてこの悪事か
 子にたると、只顔名雷一と云ふれど、何れの子細か存せざるとせ
 ぶ極の事もこのりあるべし。又、おけ方ぬあつて、並刑法は、後此と扱ふは
 べし。大原悦光のまゝあつて、まゝも大の恩義を尊ぶたふりあり。い
 唯今つゝの世付を看へて、一と云ふ、一と云ふ、一と云ふ、一と云ふ、一と云ふ、
 共計こゝぬ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
 入り、入り、入り、入り、入り、入り、入り、入り、入り、入り、入り、入り、
 のと、のと、のと、のと、のと、のと、のと、のと、のと、のと、のと、のと、
 さんとうあつて、誠、誠、誠、誠、誠、誠、誠、誠、誠、誠、誠、誠、
 討交ひあむ、女、女、女、女、女、女、女、女、女、女、女、女、
 る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、
 扱、扱、扱、扱、扱、扱、扱、扱、扱、扱、扱、扱、
 搜、搜、搜、搜、搜、搜、搜、搜、搜、搜、搜、搜、
 たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、
 又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、
 こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、
 白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、
 安、安、安、安、安、安、安、安、安、安、安、安、
 たり、たり、たり、たり、たり、たり、たり、たり、たり、たり、たり、たり、
 たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、
 こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、

る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、
 扱、扱、扱、扱、扱、扱、扱、扱、扱、扱、扱、扱、
 搜、搜、搜、搜、搜、搜、搜、搜、搜、搜、搜、搜、
 たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、
 又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、
 こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、
 白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、
 安、安、安、安、安、安、安、安、安、安、安、安、
 たり、たり、たり、たり、たり、たり、たり、たり、たり、たり、たり、たり、
 たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、たる、
 こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、こそ、

服谷を深とらさせ

科、科、科、科、科、科、科、科、科、科、科、科、

才原罪に
伏する圖



松原
階計
照谷
實圖



才系
罪小脂
柴谷
橋田
折圖



繪本金太郎卷十一

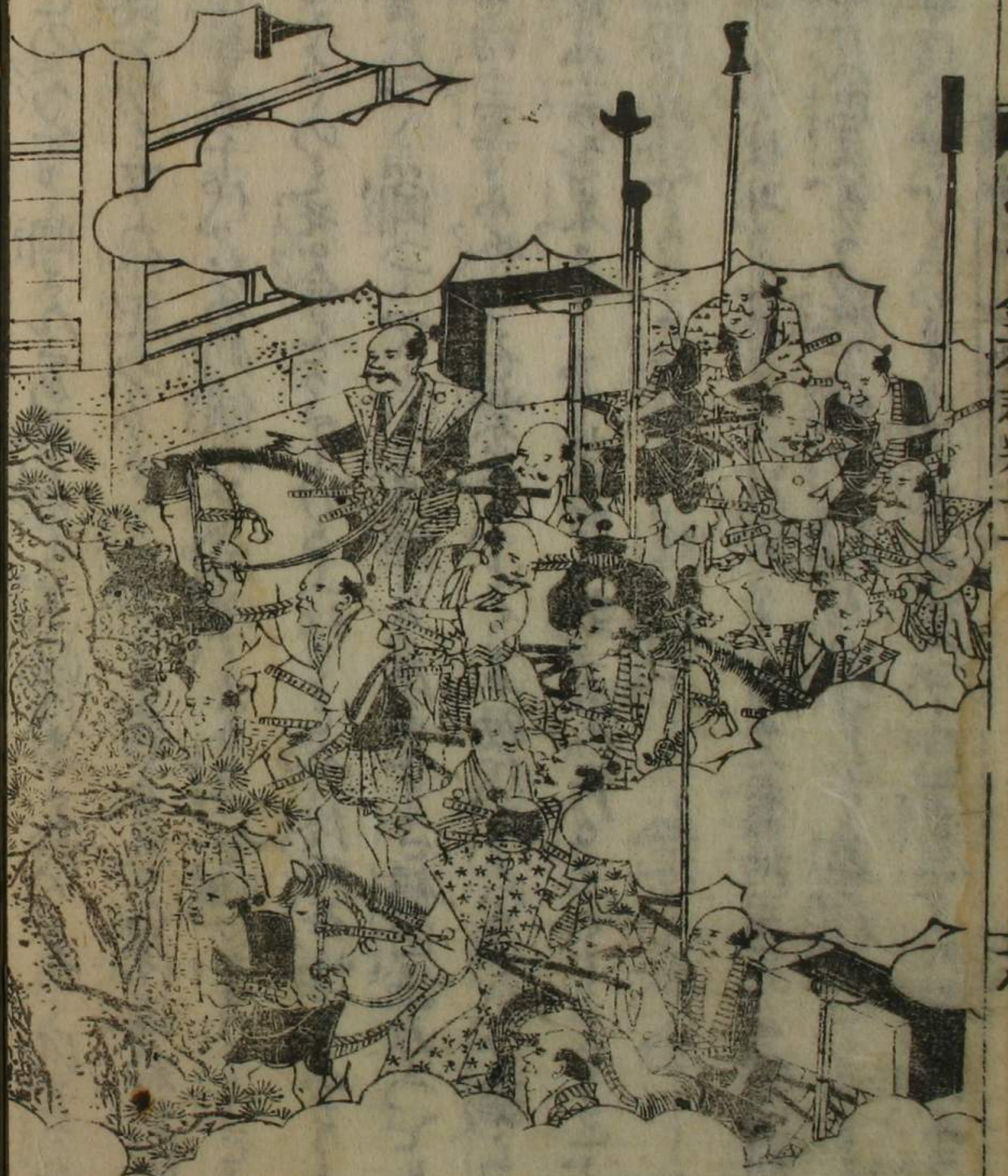
繪本金太郎卷十一

大江廣元
仁惠柴谷
橋田三某氏
舟へ移る人圖



舟へ移る人圖

てんじん
手負人
握原氏の
館



たゞのそだを麻の沛下におろすの後國法の罪科ふあころるべし。
手負のものを庭上へ駕をりら来るいさうゆるぐと有ぬ同
舊地門外に戸を共し即死の骸をのく棄物の内ふりけるぬ。
紫若く家未岩頼甚藏よりりの駕をりせそある。大まよて外記
が耳ふゆいせ扱色外記と叫ばれば外記岩頼が叫ぶを聞て廣元の
叫たふとや思ひらん。甚藏ふ向ひ首を上げまこと重たは此を
りつて此度よく沖言ぬ賜る事。唯怒入なりとりりし。甚藏色
とまろくして岩瀬甚藏は遠いふまよとりりし。外記怒て
已志の者何ぞ此とろく来るべん。甚藏がうら、也免を教ふお
をりつては遠いふまよ上はる。外記まよび吃て列候の心産おとれく
式がまよとろく怒とある。向下賊の此をのりく来るのまよ棄物ふ

のまよとろく憚をろく。まよ一言ある。せめては門外へまよくまよと
ふぬ。廣元もも瓜はひるまよ。まよ家のくぬぬ慇懃とつくまを見んて
あはしむまよのまよ思ひとん。甚藏ふむいぬぬのまよぬ。まよのまよ
此とまよへ門外ありして駕のせよと有。く甚藏やまよび
りりる。此処は門外にいてまよれば外記まよをまよぬぬ。恍惚
とては門外あるぬ。まよのまよと駕の中ぬ助のせよとまよ
り。是れまよとるく感。まよのまよとまよ。まよとまよ。友千代の
家士をのく。彼中ぬまよとまよ。まよをまよてまよ。まよとる。



7

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters, is visible on the page. The text is arranged in several horizontal lines. A vertical line of text is also present on the right side of the page, possibly indicating a page number or a section header. The ink is dark and the paper is aged and yellowed.

